

設楽発掘通信

No.57
令和2年
10月号

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の

地元説明会を開催します！

今年度の発掘調査も進み、各遺跡でさまざまな調査成果が出てきました。それを受けて、胡桃窪遺跡では先日九月十九日に現地で地元説明会を開催したほか、添沢遺跡や下延沢遺跡では、webによる説明会という新たな形の説明会を行うことをお知らせしました。

さて、川向地区の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、弥生時代中期後葉（今から約二千年前）の集落跡の調査で、周堤の残る良好な状態の竪穴建物跡が発見され、大きな話題となりました。現在は、その下層で確認されている、縄文時代中期後半（今から約五千年前）の集落跡の調査を行っており、竪穴建物跡などが見つかっています。この調査の様子を、町内の方にご案内するために、下記のように、地元説明会の開催を十一月二十一日（土）に計画しています。胡桃窪遺跡で実施したように、新型コロナウイルス感染拡大防止の対策を行った上での開催となります。そこで皆様にも、ご来跡時にご協力をお願いすることがありますので、ご了解下さい。

（川添和暁）



写真1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡出土の縄文時代中期後半の土器片

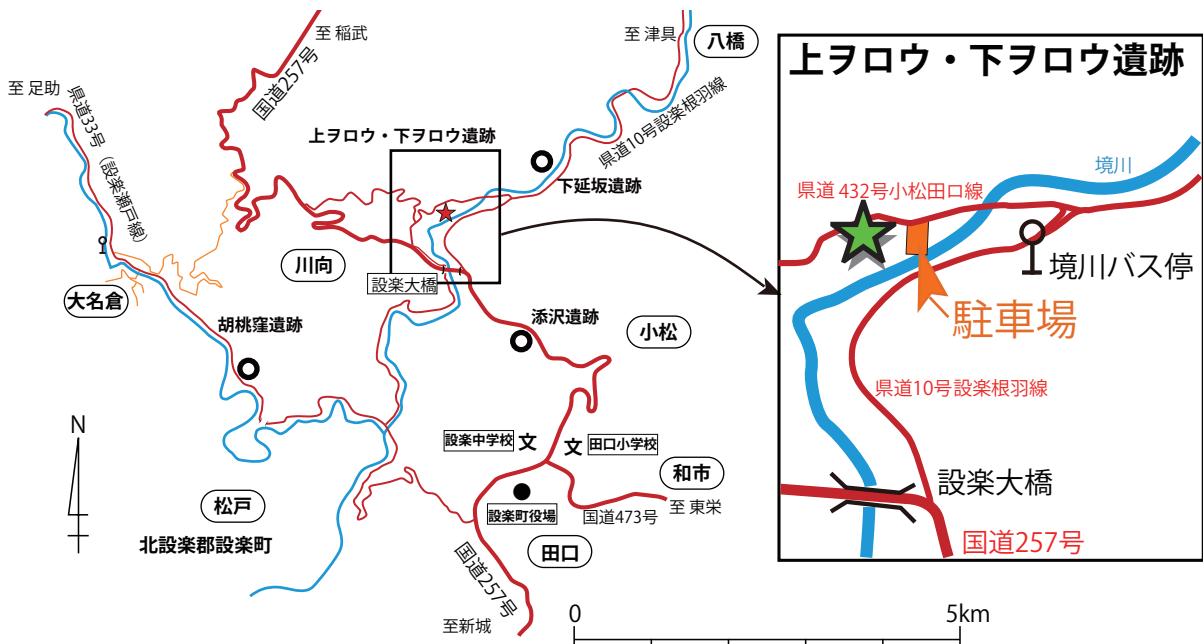
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 地元説明会 会場のご案内

11月21日（土）午前10時～12時、午後1時～3時まで遺跡現地で遺物の展示、資料配布を行います。

現地の駐車場は、数台しかございません。密を避けるために、少しお待ちいただく場合がございます。

なお、ご参加の方々は、ご名前と連絡先のご記入をお願いします（感染予防対策以外には使用しません）。

*開催の詳細・お問い合わせは、愛知県埋蔵文化財センター調査課（電話 0567-67-4163）、堀木携帯（080-1571-4984）まで。



かみ 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査

A区の空撮が終了しました

季節は秋になり、ようやく残暑も明けた中、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、A区（現在掘削中！）の空撮をおこないました。上空から撮影すると、弥生時代中期後葉の集落跡がよく見えます。前号では、弥生時代中期後葉の集落跡の発見をお伝えしましたが、そこからさらに新しい発見がありました。それは、集落を囲うように掘られた溝が新たに確認されたことです。幅約一メートル、深さ約五十センチメートルに及ぶ溝は、繰り返し掘り返されていることも分かりました。当時の集落構造がわかる、良好な事例です。また、周堤が明瞭に残る竪穴建物跡1055SIでは、前回につづき二点目の紡錘車（ぼうすいしゃ）が出土しました。同じ竪穴建物内から二点出土することは、とても珍しい事例です。この集落の人々は、糸を作ってどんな生活をしていただろうか。興味深い事例です。

空撮も完了し、いよいよ弥生時代より下層の縄文時代の調査が始まります。C区（現在掘削中！）の調査も本格的に始まりますので、次号にご期待ください。（田中 良）



写真2 遺跡全景 東から

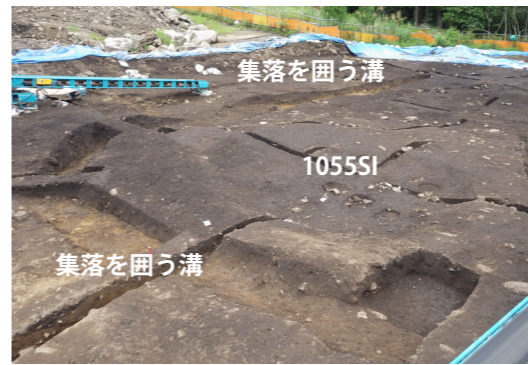
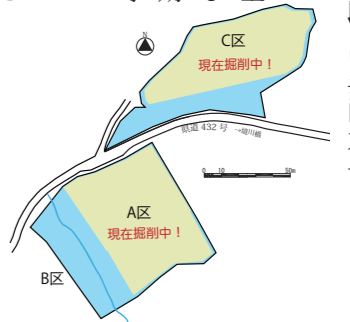


写真3 A区 竪穴建物跡と溝の位置関係 南から



しものべさか 下延坂遺跡の調査

A区（現在掘削中！）の空撮が終了しました

川向にある下延坂遺跡では、八月二六日に、A区（現在掘削中！）の全景写真撮影を行いました（写真4）。

先に報告しました縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴状遺構四基、土坑一〇〇基程の他に、調査区中央部には鎌倉時代から室町時代にかけての土坑二九基がみつかりました。これらの土坑は山の斜面を棚状に削り出した平坦面に二列から三列の列状に並んでみつかりました（写真5）。その平面形は円形から楕円形で、大きさは径二〇センチから径一四〇センチまでの大小のものがありました。出土遺物では土師器の伊勢型鍋や羽付鍋（写真6）などがみつかりました。現在はA区（現在掘削中！）の南にあるB区（現在掘削中！）の調査を進めております。（蔭山誠一）



写真4 A区遠景 南より



写真6 土師器の羽付鍋出土状況 (159SK) 東より



写真5 中世の土坑群 南より



くるみくぼ 胡桃窪遺跡の調査

地元説明会を実施しました

胡桃窪遺跡は九月十九日に地元説明会を行いました。参加された方々には遺構や遺物を現地で見せていただき、多くのご感想やご質問をいただきました。ありがとうございました。

県道の山側にあたるB区（現在掘削中！）の発掘調査は八割程度終了しました。前号で紹介した二段目の縄文時代の竪穴建物跡は床面まで掘削を終えましたが、竪穴内部や周囲に柱穴跡と思われる遺構が確認されました。また、二段目の平安時代の竪穴状遺構からは炉跡や、火を使った痕跡である焼土が見つかりました。三段目の縄文時代の竪穴建物跡（写真8）は炉跡以外の掘削が終わり、炉跡

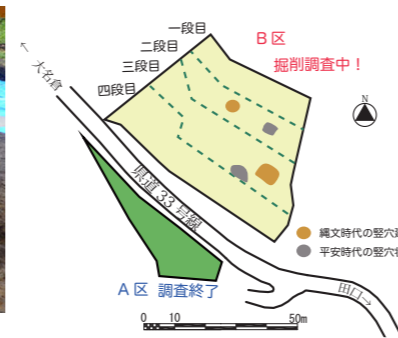


写真7 遺跡全景 南西から

が同じ床面から二基見つかりました。また似たような柱穴列の配置が二列あることから、同じような建物を二回建てていたことがわかりました。写真の赤い旗の遺構が建物の古い遺構、青い旗が建物の新しい遺構となります。今後の予定としては各竪穴の残りの遺構の掘削と、四段目の遺構掘削をもって胡桃窪遺跡全体の発掘調査が終了します。（渡邊 峻）



写真8 三段目の縄文時代の竪穴住居



そえざわ 添沢遺跡の調査

A区（現在掘削中！）の調査進行中！

田口地区の添沢遺跡ではA区での調査が進んでいます。現在、国道沿いのAa区、小松川に近いAc区での調査と空撮が完了し（写真9）、その間に挟まれるAb区での調査の準備が進んでいます。

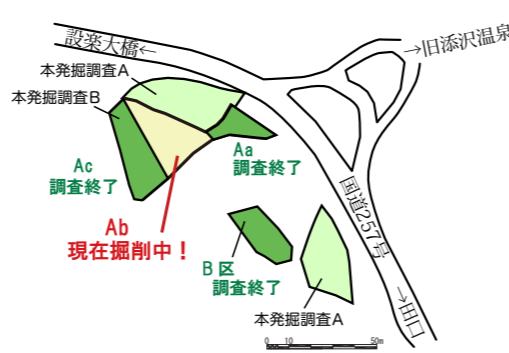
残念ながら建物の跡などは見つかりませんが、古い谷の痕跡が見つかり、大昔には現在の地形とは異なる光景が広がっていたことが判明しました。A区からの出土遺物は少数で、中世以前の古い時代のものが見つかっており、江戸時代以降の遺物は出土していません。その中でも特に古いのが縄文時代早期（約九千年前）の押型文土器と呼ばれる土器の破片で、Aa区とAc区で一点づつが出土しました（写真10）。それぞれ二点とも楕円状の文様が付けられています。（河嶋優輝）



写真9 Aa区空撮写真



写真10 出土した押型文土器 (上: Ac区 下: Aa区)



石器に使用される石材について

設楽町内の後期旧石器時代や縄文時代の遺跡では、たびたび白色や黄色でツルツルした石器が出土します。これらの石器のほとんどは溶結凝灰岩という在地の石材を使用しています。今回はこの溶結凝灰岩についてご紹介します。

溶結凝灰岩は、新城市の柵山や鳳来寺山周辺で産出する岩石です。現在でも、柵山や下を流れる海老川支流の谷川などで採集できます。溶結凝灰岩は火山灰が熱で溶けて冷えて固まった岩石です。そのため、ガラス質で割り易く、割れ口が鋭利になるため、狩猟具（尖頭器や石鏃）や加工具（搔器や削器）などの石器に使いやすく、後期旧石器時代から縄文時代まで多用された石材です。元々の岩石の色は、緑色（写真11）や赤色（写真12）、青色など様々な色をしています。緑色が柵山や谷川などで安易に採集できます。

これらの色は、そのまま遺跡から出土することはほとんどありません。前述したように、大半は長い年月の間に風化し、色が抜け、白色や黄色になります。先学の研究では、「白色風化石材」ともよばれています。縄文時代中期～晩期では灰色や緑がかった状態で出土することがあります（写真13、写真14）。さらに古くなると、緑色は色が抜けて白色や黄色、赤色のものはピンク色（写真15）の状態です（写真16）。

溶結凝灰岩は、奥三河の石器時代（旧石器時代・縄文時代）を通して使われてきた石材です。特に、古い時代（旧石器・縄文時代早期）ほど積極的な利用がみられます。時代が新しくなっても、なくなることはなく、小形の剥片石器（石鏃や削器など）に利用するなど、重宝されてきた貴重な岩石です。（田中 良）



写真11 溶結凝灰岩 緑色



写真12 溶結凝灰岩 赤色



写真15 有舌尖頭器 縄文時代草創期
(川向東貝津遺跡出土)



写真13 石鏃 縄文時代晩期
(石原遺跡出土)



写真16 細石核 旧石器時代
(川向東貝津遺跡出土)

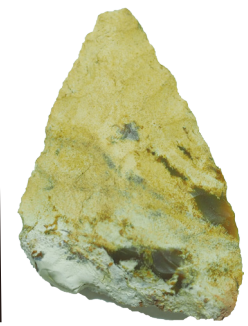


写真14 石鏃 縄文時代中期
(石原遺跡出土)

設楽発掘通信

No.57 令和2年10月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県富田前ヶ須町野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

国際文化財株式会社

